



## “スキ間に 生きる”

轟産業(株)代表取締役社長  
化学機械科 S20年卒業  
酒井 貞美 氏

### 【編集にあたって】

今回登場いただいた轟産業(株)代表取締役社長 酒井貞美氏は、どちらかというと華やかな場に出ることを余り好まれない方であることを、冒頭のご紹介とします。

ところで、酒井氏は“二足のワラジを履ける程の能力を、自分は持ち合わせていない”と周囲からの公職の要請も固辞され、本業一筋に今日まで邁進されて来られた。ただ唯一、この福井大学工業会だけは諸行事にも出席され、また前・福井支部長として長年、前・黒川理事長を支え、共に工業会の発展に尽力された。今回は特別にご無理をお願いし、ここに掲載するに至った。

酒井氏は日曜・休日も関係なく1年365日の殆どを、会社に出勤され仕事をされている。そして折々の記録を延々と綴ってこられた。社長室を埋め尽くして余りある貴重な資料となっている。

現在満83歳、会社設立から第一線の経営者として創業以来満60年を迎える今日までの膨大な記録の中から、ここに掲載するものは会社創業時代に至るその記録の一端である。今も国内最高齢の現役社長を目指し毎朝の日課として、腕立て伏せ、真向法による腹筋運動800～1000回の体操を欠かさない。そして「今日まで取引先の倒産等、何度か危機があったがその都度、辛抱し努力して乗り切り、今まで赤字決算は一度もない」と胸を張る。

(編集：M45卒 絹谷信博 参考文献：轟産業(株)社史 42年史・58年史)

## PROFILE

### 福井高等工業学校入学までの略歴

出身地：福井県今立郡岡本村轟井（現越前市轟井町）  
高橋家の六男として出生（6人兄弟の末子）  
生年月日：大正13年8月11日  
最終学歴：福井高等工業学校 化学機械科  
創業：昭和23年3月1日 轟化学研究所開設  
会社設立：昭和29年9月20日 轟産業(株)設立  
会社概要：平成19年7月20日決算実績  
売上高：409.5億 経常利益：25.9億  
従業員：350名 事業所：東京支社他計35カ所

#### (追記)

本原稿を編集中の今年2月12日、創業から苦楽をともにされたかけがえない伴侶 澄子様を、亡くされたばかりであることを申し添え、茲に衷心よりご哀悼の意を表します。

## 波乱のスタート

### ◆◆ 学徒動員 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

昭和 18 年 4 月、酒井は福井高等工業学校 化学機械科に入学した。日本は昭和初年頃から軍需中心の重工業の発展によって不況を克服していたが、技術者の供給が追いつかず、大学と高等工業に理工系の学科を増やし技術者を養成しようとしていた。福井高等工業の化学機械科も新設されたもので、酒井は 2 期目の入学生だった。戦時国家体制を押し進めるための国家総動員法はそれより先、昭和 13 年 5 月に施行され、軍需物資の増産、兵器の開発・強化に国の総力を挙げていた。そのための頭脳となる理工系の技術者養成に力を入れ、化学機械科は当時の先端的技術を学ぶ場であった。

酒井は福井高等工業学校 1 年の時に兵役検査を受けた。戦時国家では 20 歳になると兵役に服する義務があり、身体検査を受ける。これが昭和 18 年 12 月より 1 歳繰り下げ、19 歳からに強化されていた。しかし理工系の大学・高専生は卒業まで兵役が猶予されていたので、酒井は実際に軍隊へ入ることはなかった。もとより、陸軍幼年学校を志願していたので、兵役を免れたという意識があったわけではない。敗戦で多くの若者が犠牲になったことを見る限り、この兵役猶予が酒井の人生において、結果的に極めて重要な意味を持ったといえよう。

昭和 19 年 7 月、横浜市の軍需工場である石川島芝浦タービンに勤労働員された。当時、化工機部門とタービン部門があり、化工機部門は日本軍が占領したスマトラの油田施設関連の資材を製造、タービン部門はジェット機の推進に使うガスタービンを開発中だった。

工場で実際に働いてみると、学生のほかにも徴用された一般の人もいて、従業員が余っていた。軍の命令による動員が先行し、工場の受け入れ態勢が整わず混乱していた。

福井県から行った学生は数人いたが、不満を募らせた。そ

こで「もっと働き甲斐のある職場へ回して欲しい」と工場長や課長にかけ合ったが、らちがあかない。血気盛んな学生たちは最高責任者の専務と交渉しようということになり、酒井が代表して直談判した。その専務が後の東芝や石川島播磨重工の経営を立て直し、清廉な財界人として有名な土光敏夫氏だった。土光氏は気軽に会ってくれ、要望を理解してくれた。翌日、学生たちは配置換えとなり、気持ちよく働けるようになった。

その後間もなく、酒井は健康を害し単身帰郷した。学校へ戻ってみると教官が入隊したりして不足し、新入生もいるので、酒井は助手をすることになった。当時は大学・高専の卒業繰上げ、中等学校の 4 年制実施、軍需工場への勤労働員で、学校の教育機能は事実上失われていた。

東京、大阪など主要都市は B29 の無差別爆撃で焼け野原になる中、勤労働員の福井高等工業生は昭和 20 年 5 月末学校に復帰し、6 月から授業が始まった。9 月の卒業まで 3 カ月余りになって、卒業論文にとりかかった。

その最中 7 月 21 日、福井市は空襲に遭い学校も下宿も焼けてしまった。卒業はどうかできたが、2 年半の在学中、動員や空襲で勉強に専念できない不幸な時期であった。



終戦直後の卒業時学校講堂前にて化学機械科第 2 回卒業生一同  
(昭和 20 年 9 月 10 日)

## ◆◆ 職転々 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

昭和20年8月15日、日本は連合軍に無条件降伏し、日中戦争以来続いた長い戦争は終わった。

酒井は下里主任教授の世話で、富山県婦中町にある日産化学富山工場に疎開していた理化学研究所(科研)へ勤めることに決まっていたが、敗戦によりご破算となった。同年9月10日卒業。学校は卒業生の就職をあっせんする機能も無くなっており、自力で探すしかない。

就職先を探すといっても、福井県内で就職できる企業は少なかった。そのうちに、丹生郡朝日町西田中にあった東洋電機(株)福井工場の幹部が退社し、大阪市東淀川区三国本町で電車のモーターを修理する車輛電機(株)を創立、従業員を募っていることを知り、そこへ就職が決まった。そして10月20日、夜行列車で大阪に向かった。

大阪の梅田、十三の駅前は焼け野原。三国駅の近くは少し焼け残っていて、その一角に工場があった。3棟の工場は窓ガラスがすべて壊れ、工作機械は宝塚市へ疎開し工場内には何もなかった。従業員は約15人。疎開した機械を工場へ運び入れることから仕事は始まった。昭和20年12月末であった。

大阪で就職はできたが、瓦礫ばかりの街では衣食住すべてが窮乏、とりわけ食べる物が無い。仕方なく食料は、福井から運び込むことにした。

月に1~2回、土曜の夜行で実家へ帰り、リュック一杯に手当たり次第食糧を詰め込み、日曜の夜行で大阪へ戻り、月曜には出勤しなければならない。この食糧運びには苦勞したが、農家出身で食糧を手に入れることができた酒井はまだ良かった方である。

車輛電機(株)では掘っ立て小屋同然の工場で、電車モーターの修理・再生の仕事が細々と続けられた。しかしそこには優秀な人材が集まってきていた。大阪や京都旧帝大の電気科・機械科出身者、高等工業学校卒のベテラン技術者等、電気を専攻した技術者が主流であり、化学機械出身の酒井はさほど重要でない仕事をさせられた。

一方、会社の経営も思わしくなかった。故障や焼け残ったモーターを修理する程度では、収入はたいしたものではない。やがて従業員の待遇問題で労組と会社側が対立し、労務状態も不安定となった。酒井は昭和22年4月、車輛電機を退社した。

退社する少し前、父から福井県内の東洋薬化(株)に勤

め口があるという話が持ち込まれていた。同社は今立郡味真野村五分市にあり、旧西野財閥の経営する製薬メーカーで医薬品をつくっていた。元はセロファンを製造していたが、戦争で原料のパルプが輸入できなくなり、軍需工場になっていた。さらに空いた敷地、工場を疎開した山之内製薬に貸していた。東洋薬化では化学技術者を必要としていて、父の知人である重役から入社打診があった。

東洋薬化入社の話と並行し、丹生郡朝日町西田中の酒井家に婿入りする話がまとまり、同年5月、酒井澄子と結婚し、姓も高橋から酒井となり、同家から東洋薬化に通勤した。

新しい職場では試験室で働いた。食糧増産が急務の折で、植物ホルモンの研究・試作の仕事が与えられた。その後、スルファミン、スルファチアゾールの錠剤やマーキュロクロム(赤チンキ)の製造の仕事に就いた。

結婚、そして福井高等工業で学んだ化学を生かせる職場。酒井の故郷における新しいスタートは順調であった。しかし半年ばかりたって雲行きが怪しくなる。

昭和22年の12月、山之内製薬は疎開工場を閉鎖し、京都山科工場に統合する計画を打ち出した。山之内製薬から来た少数の社員以外の従業員は整理されることとなった。さらに山之内製薬と密接な関係にある東洋薬化が、輸入できるようになったパルプでセロファン製造を再開することになり、これに伴って生じる余剰人員約100人を整理することにした。

敗戦後のどん底から立ち上がろうとする混乱の中で、どこにでもある普通の出来事だった。従業員は人員整理を撤回させようと、酒井ら2人が代表になって会社と交渉した。大勢は覆らず23年1月、人員整理は計画どおり進められた。酒井も2月20日付けで解雇通告された。

## 瓦礫の中から



空襲直後の福井市街

## ◆◆ 轟化学研究所設立 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

敗戦からわずか1年余りの間に2度の失職である。当時、この程度の失職はありふれたことだったが、酒井のショックは大きく、考えた末に「自分は会社ために縁がないのかもしれない。ならばいっそのこと、自分で何かやってみよう。イチかバチか、商売に賭けてみよう。自分が学んだことを生かす意味で医薬品をやれないものか。」

資金を必要とするが手元にない。やむなく借入れをして住宅兼事務所を建てた。土地約30坪、間口2間半、奥行き3間半のウサギ小屋である。妻と長男、妻の家族、6畳の部屋に大人5人、子供1人の極めて狭いものだった。家の周囲には整理された道路はなく、アシや背の高い草がいっぱい生えていた。「まるで全学連のアジトみたいやった」と酒井はふり返り苦笑する。

小さな看板に描かれた「轟化学研究所」。昭和23年3月1日であった。

## ◆◆ スキ間の発想 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

酒井は2度の就職体験から「自分は何一つ優れた特徴や天分、能力を持ち合わせていない。極めて平凡な才能しかないから、これからの戦後の厳しい競争に生き残るためには並みの努力、体力では勝てない」と常に考えていた。

そこで自身努力すれば少なくとも生き残れる分野は、人がやらない分野、人が嫌がる分野、将来伸びると思われる仕事に、人の2倍、3倍以上努力するほかないと思った。とにかく寸暇を惜しんで努力する以外にないと考えた。「自分の取り柄は、人より熱心に辛抱して努力するところだけだ。頭も決して人より優れていない。」このような自分の能力を踏まえ、開業するに際して酒井は三つの方針を立てた。

1. 人のやらない、嫌がる仕事をする
2. 独自の商品を選ぶ
3. 小さくても金額の高い商品を選ぶ

酒井の資本金は小額である。大資本の商売にはかなわない。つまり「スキ間」の商品である。東洋薬化(株)での経験から、少量でも金額が高い赤チンキに目をつけた。赤チンキは、メチル水銀が水俣病の原因であると分かって以来製造されていないが、当時は家庭常備薬の一つだった。

元手は、実家高橋家の杉の大木3本を売った15

万円から家屋の土地代を差し引いた10万円。このお金で製造器具を購入、舞鶴の海軍工廠に出向いて原料となる水銀を買った。潜水艦の重心を安定させるために一番底に水銀が大量に入っていたからである。

ところが、手に入れた水銀は純度が低く、赤チンキは少ししかできない。それでも何とかできあがった赤チンキを、酒井が小瓶に詰め、澄子がラベルを貼ってトレーシングペーパーで包装した。

こうして商品化した赤チンキだったが、終戦後の混乱期、食糧を確保するのがやっとの人々には赤チンキを買う余裕もなかった。大阪まで売りに行ったがほとんど売れず、防腐剤として使われていた酸化水銀や塗装剤の硫化水銀も作ってみたが売れず、赤チンキ事業は失敗に終わった。

闇価格が横行する中、市民は疎開させていた着物などを農家に売って代わりに食糧をもらう「タケノコ生活」を余儀なくされていた。食べ物の確保が精いっぱい時代、食糧に関するものでなければ商売は難しい事情もあった。

酒井は次に、酢の素に着目した。薄めて食用酢として売ろうというのである。しかし当時、氷酢酸は薬品で統制品であり、なかなか手に入らない。そこで東洋薬化時代、同じ職場で働いていた富山の小沢薬局に頼んで仕入れ、それを原料にカラメルを入れて着色、小瓶に詰めラベルを貼り八百屋に卸した。

そして次に目をつけたのが、ふくらし粉である。配給された小麦粉に塩を少し入れ、ふくらし粉を混ぜ油を引いてフライパンや鍋で焼くのだが、ふっくらと軟らかくなり膨らんで大きくなる。子供たちは喜んだ。この酢の素とふくらし粉は農協や八百屋に順調に売れた。

しかし酒井はまだ誰も手につけない商品分野を探していた。そこに持ち込まれたのが定性分析器の開発だった。



当時のマーキュロクロム末、ラベルを貼って、包装するのは妻澄子の役目だった

## ◆◆ 福井大地震 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

その時、酒井は大野から福井市へ向かう電車に乗り合わせていた。ちょうど電車が福井駅の手前、越前新保にさしかかったのは、昭和23年6月28日、夕方5時14分（実際にはサマータイムだったので、4時14分）ごろであった。その日は朝から蒸し暑く、人々は空を見上げながら「暑いですね」とあいさつを交わしていた。

酒井は、ようやく技術商社としての前途に希望を抱き始め、その日は大野方面の2カ所の農協へ分析器を届け、戻るところであった。（当時、肥料は出回っていたが、粗悪なものもあり農家は困っていた。酒井は常々、顧客の求める製品をメーカーから仕入れるだけでなく、ユーザーの要望に合わせて製品開発できる技術商社を目指していた。そこで、肥料の3要素である窒素・リン酸・カリを分析、粗悪肥料を見破る定性分析器を作り、篤農家に大変喜ばれ、福井新聞にも掲載された。）

突然、電車の揺れがひどくなり右に左に傾く。おかしいなと思って窓の外を見ると、川の流が左右にゆっくりと揺れを繰り返している。川上から川下へ流れるのではなく、片方の岸から反対の岸へ交互に打ち返していた。びっくりしているうちに電車がドーンと横倒しになった。暑いので窓は全部開いていたので、すぐに脱出できた。

幸い怪我はなかったが、目を疑う光景がそこにあった。川の水がなくなって石ころや泥の川床が露出している。川の水が揺さぶられ、岸を越えて流出したものらしい。無気味な地鳴りが響き、春江・丸岡方面の空は土ぼこりが煙幕のように横に長く立ち上がっている。福井大地震であった。

家族の安否が気にかかる。電車の線路を伝って福井駅へ歩く。直線の線路がくねくねと曲がっていた。歩いているうちに火の手があちこちに上がってきた。駅に来てみるとプラットホームが沈下して半分ほどの低さで、機関車は横倒しになって蒸気を噴き出している。

大地震の震度はマグニチュード7.3、震源地は丸岡町末政付近であった。震源の深さ14～30kmの浅発地震で、関東大地震より規模は小さかったが、被害は大きく関東・濃尾地震に次ぐものであった。

地震に襲われた福井市以北の沖積平野は軟弱な地層だった。全壊家屋34,495戸、半壊家屋8,376戸、焼失家屋3,722戸。福井市は空襲で失った家屋を仮

小屋程度ながら再建したばかりだったが、再びこの地震で全体の約80%を失った。

地震直後から市内各所で火災が発生、主要な官公庁や会社、学校が焼けてしまった。死者3,542人、負傷者は15,849人に達した。

被害は各所に及び、工場の倒壊、焼失もひどかった。福井県産業の中心である繊維業界では、福井市と坂井市で被害が大きかった。全壊した工場は人絹織物関係で714、燃糸関係で96など、その数は1,400工場にのぼったという（『福井県繊維産業史』）。失われた織機は約16,400台、燃糸機は292,400錘、全設備の54%に達した。県内の織機台数は昭和15、16年頃の91,900台が最高で、敗戦後資材不足を克服し、やっと35,000台程まで増えたところであった。その立ち上がりを叩きのめされたわけで、経済的損失の膨大さもさることながら、心理的にも相当の打撃であった。

戦災、震災と2度の災禍から復興した福井県民の粘りと力強さは不死鳥に例えて賞賛されるべきものである。

## ◆◆ 轟産業商会の設立 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆



自宅で友人たちと  
酒井の膝に居るのは、長男で後継者の薫（昭和25年正月）

その頃酒井は、現・轟産業(株)本社所在地に「轟産業商会」を建築中だった。ほとんどででき上がり、6月末に引っ越すことになっていた。その矢先の大地震で建物は崩れてしまった。震災の跡で一斉に住宅の再建が始まるから、大工は大忙しである。

仕事をする一方で、自力で再建にとりかかった。

また酒井は建物が倒壊し、あちこちで火災が起きている最中に市内を見て回った。壊れた家の周辺に割れたガラスが散乱していた。手のつけようのないガラス

屑は、回収することもなく捨てられていた。翌日、酒井は米俵を買ってきてガラス屑を詰めて路傍に置いた。あちこち回っては袋詰めにした俵を置いて歩いた。そして大八車を引き、俵を集めて回った。兄と子ども手ぬぐいで頬かぶりをし、車を引いて焼け跡を回った。

炎天下でガラス屑を両手ですくって米俵に詰める作業は大変だった。ガラスが刺さって指が切れ、出血した。手ぬぐいで頬かぶりをし黙々とガラス屑を拾うそばを、好奇の目で通り過ぎる人もいた。「落ちるところまで落ち込んだ己の姿を惨めな思いで見ている」と語る。

ガラス屑拾いを始めてから約20日後100俵にもなり、酒井は貨車で金沢市内のガラス工場へ運んだ。価格は28万円ぐらいになったがそれを換金せず、八工取り瓶や1升瓶を仕入れた。生活物資が極端に不足していたから、飛ぶように売れた。

一方、再建にとりかかっていた家屋は親戚の力を借りたりして一部2階建てで完成し、「轟産業商会」の看板を掲げたのは10月末だった。

## 轟産業とは

「轟産業」という社名はどのようにつけられたのですか。「轟」は酒井の出身地である今立郡岡本村轟井にちなんだものである。

次に社章の「三つの歯車」の持つ意味は何ですか。もちろん「轟」の文字形に由来するが、別に大きな願いがこめられている。歯車の一つはユーザー、一つはメーカー、もう一つは商社としての轟産業を意味する。この三つの歯車が正確に、円滑に回転することがともに調和、繁栄し豊かになる三位一体の理想がこめられている。

酒井は「企業経営に特効薬も、卓越したノウハウもない。とにかく日々の仕事の中で“社員教育・人づくり”をする。“人づくり”とは“日々の反復であり、長く根気のいるものである”。今の時代、学歴・知識はあっても一番大事な人間としての基本ができていない。学校で教育しないから、しょうがなく企業が代わってやっている。」と苦笑する。

## ◆ 人づくり ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

酒井は入社と同時に、教育読本・経営方針等 最低必要資料を男女全社員に配布する。そして毎日の朝礼で、全営業所の社員が反復朗読し考えを述べ、所長が総括・教育する。

また酒井は毎日のように、全国にいる社員に「手紙」を書く。書信の内容は様々である。業務内容の指示・命令はもちろんのこと、新聞や雑誌・専門誌などから得た経済情報や営業マンの心得、新商品・新技術の紹介、健康管理、教養人格を高める内容まで実に多彩だ。つまり社員の人間教育の「通信教育」である。「社員の人づくりには、まず物の考え方を強く正しく素直にしなければ何事も受け入れられない。」

酒井はこの書信を送るため、年中毎日数時間、新聞などの“参考書”に目を通し、所感を綴る。

酒井は「目標に向かって邁進する努力。これを達成せんとする強い執念を長く持ちつづけることが創業精神である」と、社員に説く。「目標」は人生を活気づける最高のエネルギーである。事あるごとにこの創業精神に立ち返り、一生懸命努力し続ける限り、「道」は永遠に開かれている。



【天下の奇岩・菊花石】

社長室に置かれた天下の奇岩。岐阜県の根尾谷で産出された菊花石で、社章を彷彿させる3つの歯車模様が岩面に表す。およそ3億年前の岩石と鑑定された。人類発生のはるか以前からあったとは、なんと痛快なことだろう。